



映画めぐり 2
「思い出の昭和映画」



良一

映画めぐり2 「思い出の昭和映画」

新宿でもう一つ特筆すべきは、唯一「軽演劇」もかかる小屋、「ムーランルージュ」があったことです。

そこで出演していた若い役者に「森繁久也」がいたことは、あまり知られていないようですが……。

さて、映画の世界に戻りましょう。少年の頃の私は、どんな映画でもわくわくしたものです。

馬に乗った鞍馬天狗が蹄の音も高らかに颯爽とあらわれ、その活躍する姿に胸を躍らせ、それからアワヤ、もう絶体絶命のピンチ、という時には手に汗を握ったものです。

映画は、こんな颯爽としたドキドキ、ワクワクばかりではありません。いろいろな映画があります。もっと心に突き刺さる、つぎのようなスペクタクルもあったのです。

なにより思い出深いのは、今の今まで脳裡に焼きついて離れない映画『路傍の石』的一幕でした。悪童にそそのかさされ、主人公の少年、愛川吾一が「精神一到」と唱えながら鉄道の軌道に入り、黒い煙を吐いて突進してくる汽車を咄嗟によけ、眼下に川を見下ろしながら鉄橋の枕木につかまり、ぶら下がるというシーンがありました。

漱石の小説、「坊ちゃん」にもありますよね。そそのかされて高いところに上って飛び降り無茶をする、といった少年期によくある肝試し的な悪ふざけ、といったようなものです。

そんな少年のちょっとした悪ふざけではあったのですが、彼はぶら下がった時に新しい草履をもう手の届かない川に落としてしまいます。それは少年の母親が、正月に子どもに履かそうと、封筒作りの内職をしながらせつせと貯めた、なけなしのお金で買ってもらった真新しい草履でした。

それが何とも心に痛くて痛くて映画を見ながら涙が目からあふれ出し、あふれ出し、もうどうにも止まらないのでした。

※

昭和の喜劇王と呼ばれたエノケンこと榎本健一が活躍した時代がありました。この時期は「エノケン、古川ロッパの時代」ともいわれる程でしたが、他にエンタツ、アチャコの漫才、柳家金語楼というお笑い芸人もいました。

とりわけエノケンが好きで、必ずといっていいほど、欠かさず見ていました。エノケンの声はシャガレ声で、歌はリズム感にあふれたジャズのフィーリングでした。

「俺は村中で一番」と軽やかに演技をして客を笑わせるその仕草は、彼が独自に考え出したものだと思います。

※

映画を見るのも楽しかったですが、幕間に館内に籠を抱えて「えー、おせんにキャラメル」とか

、「えー、アンパンにラムネ、落花生」といいながらあらわれる物売りはその当時の映画館独自のものであったと思います。

懐事情がさみしいのか、誰も買わない物売りから買うのは優越感をそそられ、また買ったものを食べながら映画を見るのはなおのこと楽しかったものです。

節回しのはじめの「えー」が長いのは語尾に「キャラメル」がつき、落花生の場合の「えー」は短くもちあげ節をつける、といった具合でした。

たとえば新幹線の物売りでは、「コーヒーはいかがですか」、「お弁当はいかがですか」という掛け声で少々、映画館の物売りとは迫力に欠けると感じます。

劇場の売店のあるところは限られていて、新宿の松竹大劇場には売店が常設されていたことを記憶しています。

茹で卵、スルメ、パン類、他に弁当などが目につきました。

※

さて、さて、この脈絡のない文章も終盤に近づいてきました。

時代劇について書くのを忘れていましたよ。

忘れてはならない時代劇の役者に、坂東妻三郎と片岡千恵蔵がいます。板妻の役柄はいろいろありますが、『血斗高田馬場』がありました。この場所は今でも史跡として残されています。

J R高田馬場駅からさほど遠くない場所にあり、若かりし頃、自分が少年時代に見ていた映画に出てくる史跡の近くを通学路として毎日、通学路として利用するとは当時としては夢にも思っていないませんでした。

ここで宮本武蔵の登場です。

掉尾を飾るは、やはり宮本武蔵ではないでしょうか。

わたしは武蔵に魅力を感じて、今でも武蔵像を追い求めている者ですが、片岡千恵蔵演じる武蔵の一幕に、志村喬演じる沢庵和尚が「自分を知れ」と言い放ち、杉の根元に武蔵をくくりつけるシーンがあります。

雨が降りしきる中、武蔵が沢庵に罵声を浴びせる。そんな沢庵との問答が印象深いシーンとして記憶に残っています。